

2013年8月15日付  
「三陸新報」1面

## 連載 堤防とまちづくり

③

# 国内外から関心集まる

気仙沼市で堤防の在り方に対する議論が本格化したのは昨夏だった。国、県、市が一緒になって7月に12会場です市民説明会を開き、1200人の市民を集めた。8月から10月にかけては市民有志による「防潮堤を勉強する会」が課題を整理した後、浜ごとの議論に移行していった。

そして説明会を重ねた結果、今年7月22日現在、堤防整備を計画している78海

岸のうち56海岸で「高さや復旧位置でおおむね合意した」と各管理者は判断。合意形成率は72%に達したが、行政が「合意達成」と判断した地区で、「計画を受け入れた覚えはない」と不満をくすぶらせている住民もいる。

「説明会で質問や意見がなければ合意と判断するのか」。勉強する会は昨年11月と今年7月、村井嘉浩知事に宛てて質問状を提出し、限ら

れた人を対象にした説明会の開催方法、合意形成の判断基準などに対して問題提起した。

県は、今月6日に気仙沼市で開かれた市民代表との意見交換会で、「地域の総意で了解してもらったときに合意を得たと判断している」と回答。年内の合意を目指して最大限努力する方針と、最終的には海岸管理者が判断する考えを合わせて示したが、堤防高の変更は重ねて否定

したため、3時間にとどまり、平行線のまま終わった。勉強する会発起人の菅原昭彦さんは「地区によって地形や住民の価値観は多様であり、感情的な対立を生まないと、合意形成に向けて丁寧な話し合いが必要」と指摘。「話し合いにより、安全性を含めて納得する答えを出すには、十分な情報や対案も必要だ」と話している。

津波で大きな被害に迫っている。

問題解決のため、土木や自然環境を専門とする大学教授ら識者も立ち上がった。東京大学名誉教授の養老孟司さん、俳優の菅原文太さんらが呼び掛け人となった「東北の未来を考える」防潮堤を再考するシンポジウムは、東京と仙台で開催。小泉や大谷の問題などが紹介された。

### 視座問題の形成合意

### 村井知事に質問状

### メンバー担う発信情報

### 勉強する会



仙台で開かれた防潮堤を再考するシンポ（7月13日）

じて堤防を整備し、東北の豊かな自然が失われることを問題視した。「もう被災地だけの問題ではない」と世話人を務めた千葉一さん（大谷出身）。安倍総理に計画再考を求め、インターネット上で署名活動を展開している団体もあるという。

NPO「森は海の恋人」事務局長の畠山信さんのように、講演会やシンポジウムに呼ばれて堤防問題を発信し続けているメンバーもいる。日弁連や日本財団などから講師を依頼された畠山さんは、津波で生まれた湿地の保護を目指しており、「国内外が気仙沼市民の出す答えを注目している」と未来のための選択を期待している。

（今川悟）